

水

Keep Water Clean



身近に当たり前のようにある「水」。意外と知らない水のコトを一緒に考えてみませんか。

蛍が舞う理由？

45 億人

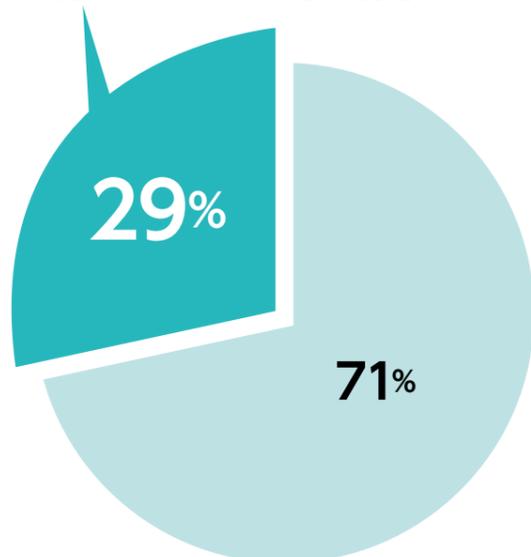
が安全に管理された衛生施設（トイレ）を使用できません。

21 億人

が安全に管理された飲み水を使用できません。

井戸水とブレンド？

21 億人が安全な飲み水を利用できない



世界では 29% の人が安全な飲み水を利用できず、そのうち 1 億 5,900 万人は、湖や河川、用水路などの未処理の地表水を使用しています。

(出典) JMP 報告書「衛生施設と飲料水の前進：2017 年最新データと持続可能な開発目標（SDGs）基準」

蛇

口をひねれば水が出る、トイレで用を足せば水が流れる――。

当たり前のようなことですが、世界に目を向けると約 21 億人が、安全に管理された飲み水を使用できず、1 億 5,900 万人は、湖や河川、用水路などの未処理の地表水を使用しています。

一方、安全に管理された衛生施設（トイレ）を 45 億人が使用できず、このうち約 9 億人以上は、家や近所に利用できるトイレがなく、道ばたや草むらなど、屋外で用を足す、屋外排泄を行っているのです。

日常のなかで、何気なく水を使うことは当然のように思うかもしれませんが、何の自由なく水を利用できることは、世界的に見れば、とても恵まれているといえます。

持続可能な開発目標

さらに全世界で約 18 億人が、糞便によって汚染された飲料水源を利用し、トイレや公衆便所など、基本的な衛生施設を利用できない人々も約 24 億人

水はあつて

当たり前？

もいます。そして世界人口の 40% を超える人々が、水不足の影響を受けていますが、この割合はさらに増えると予測されています。人間の活動に起因する廃水の 80% 以上は、まったく処理されないまま川や海に排出され、汚染を引き起こし、劣悪な環境のもとで感染症が広がるなどの問題がまさに今、この瞬間も起こっているのです。

こうした問題を継続して解決し、誰ひとり取り残さないという理念のもと、2015 年に国連で持続可能な開発目標「SDGs = Sustainable Development Goals」が採択されました。

三芳町のミズノコト

一方、三芳町の水に目を向けてみると「蛇口の水はどこから来ているのか」「なぜ三芳町の水は美味しいのか」「こぶしの里でホタルが舞うほど、きれいな水がなぜあるのか」など、当たり前のことを知らないことに気が付きます。

三芳町の水はこの川から来ているのか、どこの浄水場から

町の浄水場に水が運ばれてきているのか――。

実は、荒川から取水し、大久保浄水場から運ばれてくる県水と井戸水をブレンドしている事実を知っている人は余りいないのではないのでしょうか。

そして、こぶしの里を舞うホタルの見ごろは 5、6 月ですが、その時期以外でもこぶしの里の脇を流れる「子どもの川」が常にきれいに保たれている裏側には、地域の人たちの想いが隠されていることもあまり知られていません。

今月の特集のテーマは「水」。命の源、水――。水のことを一緒に考えてみませんか。

全ての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する。

6 安全な水とトイレを世界中に



あまりにも多くの人々が、今でも安全に管理された給水・衛生施設を利用できていません。水不足や洪水、適切な廃水管理の欠如は、社会と経済の開発も阻害します。水効率と水管理の改善は、さまざまな部門や利用者からの競合、増大する水需要のバランスを保つうえで欠かせません。2015 年の時点で、世界人口の 29% が安全に管理された飲料水の供給を受けておらず、61% は安全に管理された衛生サービスを利用できていません。2015 年の時点で、8 億 9,200 万人が屋外排泄を続けています。

10 人に 3 人は安全に管理された飲料サービスを利用できていない



(出典) 国際連合広報センター The Sustainable Development Goals Report 2018



持続可能な開発目標 SDG's とは？

「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals, SDGs[エス・ディー・ジーズ]）」は、2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」にて記載された、2016 年から 2030 年までの国際目標です。持続可能な世界を実現するための 17 のゴール（目標）と 169 のターゲット（取り組み・手段）から構成され、地球上の誰一人として取り残さない（no one will be left behind）ことを誓っています。SDGs は発展途上国のみならず、先進国も含めた全ての主体が取り組む普遍的なものであり、日本でも積極的に取り組んでいます。

そうなんだ！

